

上伊那教育会 主催
文学講演会 開催

期日：令和3年10月22日

会場：上伊那教育会館講堂

『芥川龍之介の応援～「井月の句集」誕生のために～』
堀井 正子 先生（近代文学研究家）

教育会の職能研修事業では、教師としての専門性を磨くとともに人間性の向上を図り、地域ともども生涯学習の機会とするために講習講演会事業を実施しています。文学研修は、哲学研修、授業研修とともに教育会の三大研修として位置づいています。今回の堀井先生の講演会は、一般の方の募集を取り止め、参加者を各校1～2名に制限する等、感染症対策を十分に行い実施しました。講演の様子は「ケルン」内で公開されています。

『堀井正子 先生 プロフィール』

千葉県生まれ 東京教育大学文学部卒業
高校教員、短大、長野高専、信州大学、中国の
武漢大学等で講師を務める。

現在、県カルチャーセンター、八十二文化財
団教養講座の講師、信越放送ラジオ「武田徹
のつれづれ散歩道」にレギュラー出演中。信
濃毎日新聞「ケルン」の「ことばのしおり」
の執筆等を担当。

現在は、長野市に在住。

<主な著書>

「ふるさとにはありがたきかな
—女優松井須磨子—」

「戸隠の絵本」

「源氏物語 おんなたちの世界」

「ことばのしおり」

「ことばのしおり 其の弐」

「出会いの寺 善光寺」 など



堀井正子先生 講演の概要

まず、井月の書いた句についてですが、「妻持ちしことも有りしを着衣(きそ)初(はじめ)」とあるように、井月には妻がいたのではないかと思います。また、「遣(や)るあてもなき雛(ひな)買ひぬ二日月」からは子どもへの思いが感じられます。「菜の花の径(こみち)を行くや旅役者」「菜の花に遠く見ゆるや雪の山」はまさに伊那谷の風景ではないでしょうか。井月の句は北信にも句碑があり、多くに残されています。しかし、他の俳人と違って自分ではまとめることはしなかったため、誰かがまとめないといけなかったと思います。そこで、井月の句を集めて句集を出したの

が下島空谷でした。

井月の句集は大正10年にできましたが、芥川龍之介は句集ができる前から井月のことを応援していたことが、芥川が大正9年に書いた「雑筆」でわかります。芥川は大正9年の7月20日から11月12日まで飛び飛びに好きな話題でエッセイを書いていました。その中に、引用した「井月」（九月十日）があり、下島空谷がこのごろ、井月の句を収集している、井月にはこんな句があると、紹介したものです。ほとんどの読者にとって井月は初めて目にする名前だったと思います。下島空谷さんも田端では知られたお医者様でしたが、人気作家芥川龍之介のエッセイならば、目を留めてくれる読者の数は桁違いに多かったと思います。そこには、このように記されています。「井月 信州伊那の俳人に井月と云ふ乞食あり、拓落たる道情、良寛に劣らず。下島空谷氏が近来その句を蒐集してゐる。「朝顔に急がぬ膳や残り客（140）」「ひそひそと何料理（りょう）るやら櫛明り（166）」「初秋の心づかひや味噌醤油（121）」「大事がる馬の尾つつや秋の風（123）」「落栗の座をさだむるや窪たまり（146）」（初めて伊那に来て）「鬼灯の色にゆるむや畑の縄（148）」等、句も天保前後の人にしては、思ひの外好い。辞世は「何処やらで鶴（たず）の声する霞かな（041）」と云ふ由。憾（うら）むらくはその伝を詳（つまびらか）にせず。唯犬が嫌ひだつたさうだ。（九月十日）」と書かれており、井月を乞食として記し、貧しさにいとわれず生きていて良寛に劣らないとしています。

井月の句集を作った下島勲と芥川龍之介のつながりは、住んでいる家が近かった。東京の田端にどちらも住んでいました。そして、下島勲は芥川のホームドクターでした。また、それだけでなく文学芸術好きの共通点がありました。芥川が大正14年に書いた「田端人」の中にその一端がわかる文章があります。

「この度は田端の人々を書かん。こは必ずしも交友ならず。寧（むし）ろ僕の師友なりと言ふべし。

下島勲 下島先生はお医者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人と号し、乞食俳人井月の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、老来トルストイでも何でも読み、論戦に勇なるは敬服すべし。僕の書画を愛する心は先生に負ふ所少からず。なほ次手に吹聴すれば、先生は時々夢の中に化けものなどに追ひかけられても、逃げたことは一度もなきよし。先生の胆、恐らくは駝鳥の卵よりも大ならん乎。（略）」

下島氏はなぜ井月の句集を自費出版しようとしたかは、「漂泊俳人 井月全集」の「巻頭に」より引用すれば以下のようになります。

「井月は私の幼少の時代に、私の家や親類などに出入していた人物なので、まのあたり接見していたことは云うまでもなく、彼のためには、吹雪の夜さむを酒買いに遣らされた記憶さえ残っております。当時父などから、一井月は阿呆のように見えてその実案外の学者で、俳道はもとより書が中々に優れていると聞かされて、世の中には見かけによらぬ不思議な人間もあるものだと、感心させられたのであります。（略）」

そこで少し困難かも知れぬが、兎（と）に角（かく）彼の遺句を出来るだけ集めてみよう、そして若し相当集まったら、小じんまりした句集でも作ってみよう、といったような、いわば趣味的道楽心の動きが基となったわけでありまして、幸い郷里には微力ながら多少その道に理解のある弟下島富士の努力を中心として、各村落にはこれを助ける熱心なファンがあり、また地方の新聞も相当の声援を吝（おし）まなかったがために、約一ケ年半ばかりにして、兎に角あれだけの成果を

収めたのであります。(略)」

芥川は下島勲氏との手紙のやり取りでも井月のことを気にかけていたことがわかります。また、芥川は句集の題句を高濱虚子に依頼したり、句集に跋を寄せたり、短編小説「庭」にも井月を登場させるなど応援をしていました。

その後、大正10年の下島勲の自費出版「井月の句集」は初めての試みだったので、努力はしましたが、結果として井月以外の句もまじり、亡き人となっていた芥川龍之介にも迷惑をかけてしまいました。そこで、大正13年、高津才次郎は伊那高等女学校に赴任し、「井月の句集」を読んで感動し、井月の句等が伊那の各地に残っていることを知り、収集と研究に精力的に打ち込み、間違いを正し、新しい資料も加えて、昭和5年に、「漂泊俳人 井月全集」を、下島と高津の共著で刊行した。それが「漂泊俳人 井月全集」です。

それから時は流れ、昭和49年に「漂泊俳人 井月全集」の第二版が出版され、平成元年に第三版を宮脇昌三が、平成21年に第四版、平成26年に第五版を竹入弘元が出版した。そして平成30年9月に、「新編 漂泊俳人 井月全集」が、竹入弘元の責任編集で出版されています。井月の句を楽しむ心を伊那の人たちは持っていた。だから、どんどんと再版されているんだと思います。

思えば、大正10年、下島空谷が思い立ち、弟の下島富士が協力し、芥川の絶大な応援があって「井月の句集」が本としてこの世に出たからこそ、井月の顕彰は今につながったのだと思います。長く、太く。ありがとうございました。

参加者の感想

昨年に引き続き、伊那谷に関わるお話で大変興味深く拝聴いたしました。幼い頃の出会いから井月の句集を作ろうとした下島。その下島と年齢の違いはありながらも友として書や文学について語り、その下島の出版に粋な計らいをし、心からの援助をした芥川。その芥川の思いに応えた虚子ら俳人。

時間や空間を超えた縁やつながりが「井月」を世に知らしめたことを思うと感慨深く思います。この伊那にもこんな魅力的な方がいらしたこと、その井月と交流をもち風雅を語った方々がいたことを誇らしく思います。大変、楽しく、拝聴いたしました。

伊那にもこんな素晴らしい俳人がいたことを知りました。句集を制作するにあたって、様々な人が関わったこと、また、それだけの苦勞をしてでも句集を出版したいと思わせるほど、井月さんという方は愛される方だったのかなと思いました。

「暮らしぶりは貧しくても、志は良寛さんにも劣らない」という井月さんの紹介文がとても心に残りました。私自身も志高く子供に接する人(教師)でありたいと思いました。